

登場人物

私（シュンヤ） ※姉からはシュンと呼ばれている。
父（カツオ） ※劇中ではファースト・ネームで呼ばれることはない。
母（ナミエ）
姉（ヨリコ）
伯父（キヨシ）

クロス ※全員、もしくは任意の演者による。

平成の時代、バブル崩壊の兆しが見える頃。
大阪府南部、和泉山脈の麓にある町。
いかにも田舎にありそうな、古い家屋敷。

舞台は正方形で何もない。

（イントロダクション）

音楽1が響くとともに私、登場。

私はどうやら山道を歩いているようだ。

引き寄せられるように私の背後には影たちが現れ、やがて二団となった。

私

夏は真っ盛りだというのに、家のなかはひんやりと心地よい。
ぼんやりした脳髓で夢の断片をたどってみる。
ボクは今、山登りの途中だ。
やっとここまで来た。

クロス 苔むした岩場。

山のしずく。

涼やかな冷水のストリーム。

私

水源ではかぼそい水のひとすじにすぎないけれど、
自らの流れに推し進められ、ほとぼしる清流となって川へと流れ込む。
潮に引き寄せられ、やがては海に向かって大きく河口を開く。

クロス 留まっているわけにはゆかない。

母 姉 母 父 母 父 母 父 母 姉 父 母 姉 父 母 姉 父 母 姉 父 母 姉 父

かい。

あの子にそれができるかや。今のうちから規則正しい生活をするようになってくるとか、なあかんちゆうてんねん。

そんな力んでワタシにゆわんといて。

ちゃんと採用してもらえるんやろか。心配やわあ。

なんとかなるんちやあうか。

お父ちゃん、教育委員会やったらよかったのに。

やったかてどうにもなるかい。

教育長さん、カンチャさんと顔合わせこともあるんやろ。

顔合わせたかて、どうにかなるもんとちやあう。

おんなじ建物ン中にいるのに。

ごちそうさん。ほな、行ってくるわ。

行ってらっしゃい。

カンチャさんによろしゅう。

なんでやねん。

父、出かけた。

母、使い終えた食器類をかたづけ始める。

母 アンタなあ、
なに。

母 ハヤシ先生な、

母 うん。

母 どうや。

母 どうやて、なにが。

母 ほんまにハヤシ先生でええんか。

母 ええんか、て、

母 いや、ワタシはまあ、アンタがええゆうたらそれでええんやけど、

母 なにがゆいたいん。

母 ハヤシ先生は、あれやで、ええっと、そうや、ハゲてるで。

母 そらしやあない。

母 お母ちゃんな、アンタが歯科衛生士になりたいてゆうたときにな、こら将来、歯医者とのご成婚はアリやな、とは思た。

母 ご成婚、

母 そやけどいざ結婚するてなったらなあ、アンタほんまにハヤシ先生でええんか。

母 お父ちゃんもおんなじようなアタマしてるやん。

姉 母 姉

母 姉

母 姉

母 姉

母 姉

母 姉

母 姉

母 姉

母

いや違う。あの人はな、若い頃はそうやなかつた。ジュリーみたいな長髪やった。それにギターも弾けて。ワタシがゆいたいのな、ちよっと年が離れすぎてるんじゃないんか、ちゅうのんと、

姉 母 姉

バツイチやちゅうことやる。そうそれ。

母 姉

今更それゆう。お母ちゃんかて喜んでたやないの。

喜んだ。確かに喜んだよ。歯医者てゆう職業に不満はない。ハヤシ先生とは、ムラは違うても家(うち)から一番近い歯医者さんや。そこにアンタが嫁に行ったら、なあ、歯医者が息子や。そもそもウレシイ。ウレシイよ。そやけど、な、相手が再婚で、年の差が、・・・なんぼ？

姉 母 姉

十四。

やる。そのうえ、ハゲてる。

そやからそれはしやあないゆうんや。そもそもワタシが気にしてへんのかからええんや。なにお母ちゃん、今更婚約はみとめへんとかゆいだすんちゃあうやるな。それもハゲが理由で。

母 姉

いや、そんなことはゆうてないゆうてない。ワタシは賛成や。

母 姉

ほなそれでええやん。なにをゆいたいの。

母 姉

ハヤシ先生に子供さんがいいひんでよかつたな。

母 姉

子供いたら無理やったよ。

母 姉

ハヤシ先生とは評判もええみたいやし。

母 姉

そうや。ええ腕してはる。

母 姉

アンタ、それノロケに聞こえる。

母 姉

客観的事実や。

母 姉

アンタが原因で離婚したとかゆわれんようにせんとな。

母 姉

どないせえちゅうねん。

母 姉

せいぜい襟を正して、清く正しく美しく、な、

母 姉

タカラヅカちゃあうて。

母 姉

口さがない連中ちゅうのんはどこにでもいるもんや。ましてや田舎にはな。

母 姉

いややなワタシ。そんなことゆう人いたら。

母 姉

取り越し苦労かもしれんけど、

母 姉

前の奥さんはな、都会から来た人やる、ツダのマチと空気があわへんかつたんよ。

母 姉

都会より空気はキレイやと思うけどなあ。

母 姉

もおちよっと辛抱したら、ここいらも都会と変わらんようになってゆくんやのになあ。それを早いうちから見越して、ハヤシ先生、ツダに家土地買って開業したんや。

母 姉

イズミオオツからやる。所詮泉州や。あつ、

母 姉

来たな。

ふたり、しばらく黙る。
私、登場。

おはよ。

パン焼こか。

いや、ええ。なんか飲みもの。

アイスコーヒーあるわ。

母、立ち上がる。

母 姉

シュン、そんなん自分でいいええ。

私、冷蔵庫に向かう。

母の開けた冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを取り出す。

コップここ。

ああ。

シュン、今日どっか行くん。

いや。なんで。

早起きやん。

ゆうべ、早よ寝たしな。

早よ寝たん。

早よ寝た。

あ、そう。あのな、ケンちゃんな、今、ウチとこに通てんねんで。

矯正してんのやろ。

ピンポーン。

今更矯正してもな。

いや大丈夫まだ間に合うよ。この前ゆうてたわ。シュンとまた遊びたいなあて。そんなんおあいそやん。もおハナシしてもあわへんわ。

ああケンちゃんな、こないだ会ったわ。ワタシの顔見たらな、ニコニコってわろて、会釈してくれるんやで。ほんまにええ子や。子供の頃は、なあ、家(うち)にもよ

お遊びにきて、なあ、

アイツ、植木屋やろ。

そう。

母 私

母 私 姉 私 姉 私 姉 私 姉 私 姉 私 母

私　なんかもう住む世界が違うなあ。
母　偉いわあ、一人前の植木職人や。

私　下働きやる。

姉　シュンかてうまいこといったら来年の春から中学校の先生やん。

私　ニシ中なんか行きたないなあ。

母　なんでえなアンタ、ニシ中で教育実習さしてもろうたんやろが。

私　あかんわあんな学校。

母　わがの母校やないの。

私　あれっ、・・・おかしいな、チーコの声聞こえへん。

私　私、立ち上がった。

姉　ああ、そうゆうたら、

母　セミがうるさいさかい。なあこの頃ヘンやと思えへん？クマゼミしか鳴いてないやん。

姉　そやな。

母　昔はチイセミがな、いちばん多かったんやで。

姉　知らんよ。

母　小さくてかわいい、チーッって鳴くやつ。最近見いひんのはなんで。

姉　知らんて。

私　あ！

姉　どないしたん。

母　びっくりするがな。

私　やられた。

ふたり　えっ。

私　あっ！

姉　なに。

私　へびや。

姉　へび。

母　へびに食われたんか。

私　へびがいる。

ふたり　いるっ？

私　コイツ、夜中に忍び込んできたんや。チーコを丸呑みにした。くそっ、ほら見てみ、太いコブになってるアソコ、あれチーコや。

母　やめて気持ち悪い、

姉　どれどれ、

母 姉 母
ヨリコっ。
うわあ、ほんまや。ふくらんでるなあ。
アンタ女のくせにそんなもんよう見るなあ。お母ちゃんもういやいやや。

姉と私、トリカゴをのぞき込んでいる。

姉
夜中にガサゴソゆうてたんはもしかして、

音楽2。

クロス 母はトリカゴそのものを嫌悪した。
姉は生物学的な興味だけを示し、恋人の経営する診療所へと出勤した。
トリカゴの中にきちんと収まっているシマヘビ。
ボクは滑稽さと哀れさを感じたのだったが、
実はトリカゴの中に閉じ込められたのではなく、
自ら望んでそこにいるのかもしれないと考えた。
不思議なことにボクは、
ヘビをこのままトリカゴで飼ってみようかと思うのだった。

(2)

音楽2消える。

同日の昼どき。

トリカゴは布でおおわれている。

私 母 私 母 私 母 私 母 私 母 私 母 私 母 私 母
ほんまに信じてええんやろな。
。。。
ほんまにヘビはもういいひんのやろな。
。。。
なんで黙ってる。
信じられへんのやったら見て確かめたらええ。
いたらどうすんの。
いてへんよ。
そんな布かぶせて隠してもうて、見るからに怪しい。
(笑みをこぼしながら) いてへんて。
ほたらなんで中を見えへんようにしちやあるねんて。
めくってみ。

いややて。

私 母 空（から）のトリカゴを置きっぱなしにしとくのカッコ悪いやろ。またすぐに飼うさかいこれ、そのままここに置いとくしな。

私 母 あかんあかん、かたづけて。

私 母 今度はツガイで飼おうかな。ミカン箱で作ったトリカゴはな、ジュウシマツにぴったりの棲み家なんやで。周りが板で囲まれてるさかいな、きつと安心できるんやろな。ええ具合に隙間も空いてる。ツガイで飼うたらじきにヒナがかえるはずや。生きものを飼うて、死んでゆくんを見るのんはいやや。

私 母 死ぬんは、しょうがない。身をもって命には限りがあることを教えてくれてるんや。

私 母 坊さんみたいに、

私 母 坊さんがゆうてたんや。あーあ、チーコせつかく手乗りになりかけてたのになあ。

姉、帰宅した。

姉 母 ただいま。

姉 母 おかえり。今日はちょっと遅いな。

私 母 姉ちゃん、なんや先生と喧嘩でもしたんか。

姉 母 せえへんよ。え、ワタシなんか顔に出てる？

姉 母 なんかあったん。

姉 母 ないよ。

姉 母 また、この子らふたりとも隠しごとばかり。

私 母 ボクがなに隠しごとした。

私 母 その中になにが入っちゃあるか隠してるやん。

姉 母 ヘビやろ。

姉 母 ひっ！

姉、テーブルに並んだものに見向きもせず、カップ麺に手を伸ばす。

母 姉 母 ちよっと、んもう、アンタまた、

母 姉 母 これでええねん。

母 姉 母 カップラーメンばっかし。せつかく、お母ちゃんの作った煮豆やらいワシの煮たんやら用意しちやあるのに。

母 姉 母 煮たんばっかしや。

母 姉 母 ……シシヤモもある。

姉、お湯を沸かし、カップ麺を調理する準備。

私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母
姉ちゃんは昼休みに家（いえ）に帰ってゆつくりできるからええなあ。バイクで五分かあ。手ぶらで帰ってこれるしなあ。
一日中家（いえ）にいてるくせになにをゆうてるん。
（私に）ニシ中やったら歩いて一〇分やないの。
今から就職活動始めよかな。
おかしなことゆわんといて。
もうおそいわな。三流大学やしな。
教育学部でも役場やったらオッケーとちやあうん。役場かて歩いて一〇分やで。
ヨリコ、あんたもおかしなことゆわんといて。
縁故採用ばればれや。

母と私、食事を始める（少しの沈黙）。

母 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母 私 姉 母
ハヤシ先生はなに食べてんの、お昼。
先生はだいたいタワラ食堂から出前やな。
なんか美味しいもの作ってあげたら。
姉ちゃん、美味しいもの作れんの。
うるさい。ふたりだけちやあうのに、そんなことできへんわ。
ハヤシ先生よお遊びに出てるそややないの。
遊びてゆうたかてな、アレはしゃあないねん。歯医者もな、人気商売なんやで。診療所かまえたらな、近所付き合いもあるやろ、経営者としてのな。ましてや一〇年近くも住んでたら、ムラの役職（やく）も頼まれるし。
ムラの付き合いだけやのうて、
なに。
いや、まあええんやけど。
なにそれ。
先生をまた家（うち）に連れておいでな。
うん。
挨拶に来てくれたとき以来、ごぶさたないの。近くに住んでんのに。明日から盆休みやんなあ。
あかんで、用事があるんやから。
デイトやろ。
ちよっと家（うち）に挨拶に顔出してくれるくらい、
あのなあ、そんな気安うでけへんねん。ずうずうしいことでけへん人やの。それに明日はワタシ、受付のマコちゃんらと一緒にパンダ見に行くんや。

私

白浜に行くん。

姉

泊ってくるかもしれへん。

母

もつとちゃんとしてもらわんとあかん。先生と、しっかり結婚の準備をしてもらわんと。

姉

してるよ。

母

まだ式場も決めてないやないの。先方の、イズミオオツのご両親はどお思ってるのやろ。なあ、それってアンタが再婚相手やからっちゅうことで、軽んじられてるんとちゃあうんか。

姉

結婚式とかそんなあんまり期待せんといわしてほしいわ。先生再婚やからもう、ワタシらあらためて大げさなことはやりとうないんや。

母

ほたらアンタが可哀そうや。

姉

ワタシは可哀そうなことない。お母ちゃんの方がよっぽど可哀そうやわ。

母

．．．どゆこと。

姉

．．．

母

．．．

姉

．．．

母

なにかがや、ゆうてみいな。

姉

．．．

母

なにかがかわいそうなん。

姉

さっきヒコタロウとこのチアキさんが来たんや。午前中最後の患者。青い顔して飛び込んだ。C1、C1、C2、C2、C2、C1、C2、三、四カ月は通ってもらわなあき

母

まへんなあ。

私

守秘義務があるやろ。

母

チアキさんがなにか、

姉

歯磨きの仕方から教えたらないかん。

母

ああ、そら大変や。あの人、ひとのゆうこと聞けへん。

姉

お父ちゃんがな、浮気してるて。チアキさん帰りがけにワタシの顔見てニッコリわ

母

ろうて、うれしそうにゆうてきた。先生やマコちゃんのいる前でや。あれはもう、

姉

ほかのところでだいぶんしゃべってると思うわ。

母

そんなことゆうてんの。

姉

可哀そうなお母ちゃん。

母

根も葉もないことをようゆうなあ。

姉

根も葉もないことかどうか、お父ちゃんに訊いてみたらええやん。

母

あの人にそんな大それたことができるわけない。

姉

のんきでええな。いずれ巡り巡ってお母ちゃんの耳にも入ってくるやろ思うて。

母

心配ない。

姉

心配ない。

姉

母

姉

私

母

私

母

私

母

なにその根拠のない自信。

シュンヤ、アンタはだれぞええ娘（こ）はおらんのかいな。

あ、話そらした。

ああ。

ああ、やて。青年団の若い子らは楽しそうにやってるで。アンタも顔出してみたら

どうや。大学で彼女つくるのも、もう残り時間は少ないで。

別にええよ。

青年団にも結局入らず。

入りたいもんはしゃあない。

お母ちゃん肩身がせまいわ。ケンちゃんとかマコトくんとかみんな今なあ、一所懸

命青年団の仕事で汗流してるで。盆踊りの準備で大忙しなんやから。アンタひとり

ごろごろして。

なんでこうゆう話になるねん。

そやかて、

な、シュン、へビ見てええ。

ええよ。

ええっ！

へビは夜行性やろ、そやから布をかけてあげた。

もうっ、アンタっ、へビはいいひんてゆうたくせに。

驚かそ思て。

ワタシをかつ。

いや、

ほんまにもう。かけてあげたて、アンタ、へビを可愛いがってるのんか。

シュンはへビにはやさしいんやな。

私、トリカゴにかけた白い布をめくりあげた。

姉

私

姉

私

母

姉

私

母

うわー、

家（いえ）の守り神や、ゆうやんか。

チーコを呑んだんやで。

三、四日ほどかかるんちゃあうかな、消化するまで。

お母ちゃんはイヤやで。絶対捨ててや。

逃がしてやった方がもっとアンタのやさしさがへビに伝わるで。

うん。

絶対捨ててきてや。でったい。

姉、カップ麺をすすってから、

姉 ジュウシマツとちごうてへビは野性やからなあ。

音楽3。

コロス

母に責められながらボクは、自分でも驚くほど冷静だった。

母を驚かしてやるうとした残酷な試みは、失敗におわったけれど、家（いえ）の中でちょっとした波風が立てられたことに満足した。

へビとの密か（ひそやか）な連帯感。

ああ、だけどボクは、へビの身体のコブになってしまったチーコのことを哀れに思う。

ボクはへビをトリカゴから放り出すことも、トリカゴそのものを打ちやることもしなかった。

私

チーコはまだへビの身体の中で、トリカゴにいる。

（3）

音楽3消えてゆく。

翌日の朝。

父、母、姉が食卓を囲んでいる。

三人ともに朝食はすでに食べ終えている。

父

捨ててきてゆわれてもなあ、シュンヤは全部自分が面倒をみる、誰にも迷惑をかけへん、ゆうて、それで飼うてもええて許可したんやしな。後始末もそれはシュンヤの責任でやらさないかん。

家（いえ）の中でへビを飼うてるんやで。

見えへんように工夫しちやある。

ちやあうて。あれはおへビさまの機嫌を損ねんように日除けでおます。

御簾か。

ミステなに。

お姫さまの前にかかっちゃあるすだれや。

へビ姫さま。見たら目エがつぶれる。

おっと、もう行かな。

アンタ、へビ、

行ってきます。

父

母

父、出かける。

行つてらっしゃい。お父ちゃん、ちよつとお母ちゃんに冷たいでえ。(母に)なあ。
(ため息)

やっぱり浮気してるんかなあ。

なんちゆうことをゆうの。やめて。そんな心配はないから。それより、

シユンは、ゆうべも早よ寝たみたい。

そう。ほんでアンタは、

早よ寝たよ。そやけどワタシ、なんやしらんけど寝苦しかったなあ。遠足の前の日の晩はワクワクして寝られへん、ちゆうやん。それともまたちゃあうしなあ、そのうえなんかまた夜中に、

だれの車で行くんか。

え、マコちゃんかな。

かな、て。

ハヤシ歯科医院で待ち合わせ。

ハヤシ先生も車持ってるやん。

いや、行けへんから。

．．．ははーん、わかった。なるほど、そういうこっちゃな。母の勘は鋭いで。ア
ンタ、先生と行くんやろ。泊まってくるかもしれへん、ゆうてたよな。温泉泊まる
んやろ。

そら温泉も入りたいわ。

ほんまにマコちゃんも一緒に行くんか。

そうやよ。

うん、まあ、ええわ、わかった。シユンヤもそのくらい活発にな、してくれてもえ
えんやけどな。

なあ、ゆうべもまた、へんな音聞こえへんかった？なんか、ごそごそ、いや、こ
そこそかなあ、

へビがごそついてんのや。

庭で。

へビに相方がいるんやろ。そこにいるへビを捜してるんとかやあうか。

へビ姫さまを。

あつ。

来たな。

ふたり、しばらく黙る。

私、登場。

私 おはよ。
母 頼むで、ほんまにもう。
私 ああ。

母 パン焼こか。

私 ええよ。まだお腹空いてない。姉ちゃん今日、白浜行くんやんな、彼氏と。
姉 いや。

私 ゆうてたやん。

姉 マコちゃんと。

私 あ、そう。・・・土産買ってきてよ。和歌山ラーメン。最近、土産でラーメン売つてるやろ。

姉 シュンはいつでも食べられるやん。

私 いや、土産になってるのを食べてみたいねん。
姉 わかった。

私 なあなあ（とふたりを見て）、夜中になんか音がせえへんかった。

姉 やっぱり、

私 姉ちゃんも聞こえたんか。

母 （母に）な。

姉 ヘビにきまつてる。

私 足音みたいな、

姉 ヘビ姫さまに足はないなあ。

私 ヘビ姫さま、

姉 庭の方でやろ。

私 そうそう、庭で。

母 ちよっと、気色の悪いことゆわんといて。

私 あれはやっぱり足音やろなあ。

母 蒸し蒸しする夏の晩にはなあ、昔っから、変質者が夜な夜なウロウロするんよ。む

私 しむし、よなよな、うろうろ、おおこわ。

母 覗き魔か。

私 暑いさかい夜でも開けっぱなしにしとくやろ。

母 夜這いて聞いたことあるわ。

私 夜這いに季節は関係ないやろ。

姉 夜這いてなに。

私 知らんでゆうたんかい。

姉 女性は薄着になるし。

姉 ちゃん覗かれたんやで。
いややあ。
て、なに喜んでるねん。
喜んでないわ。早よ行かな。

姉、出かける。

私 行ってらっしゃい。
母 気をつけてな。おそなるんやったら電話するんやで。
姉 はーい。

間。

母 な、おかしいやろ。
私 なが。

母 ヨリコや。受付の子オラと遊びに行くんやったら、家（うち）まで車で迎えに来て
もううたらええはずやろ。それやのにわざわざハヤシ歯科に行くて。

私 何人かで行くんやろ。それやったら一箇所に集合した方が合理的やんか。
母 合理的かなんか知らんけど、お母ちゃんにはわかる。
私 ながいな。

母 ハヤシ先生とな、ふたりや。ほんで、今夜は帰らん。今どきの若いもんは、そん
なふしだらなことを平気でしよる。

私 姉ちゃんは若いとは思わへんけどな。そやけど、まあ、それが今どきの普通とちや
あうか。

（唐突に、厳しい口調で） シュンヤ。

私 なんや急に。

母 お母ちゃんな、今日は婦人会の寄合や。

私 盆踊りの稽古な、

母 それとバザーの準備や。お昼はみんなでいただくしな。

私 わかった。適当になんか食べるよ。

母 ワタシが帰るまでに絶対にへビを捨てとくんやで。

私 . . .

母 ええな、

私 . . . ああ、

母 わかったな。

私 ああ、

母
私 でったい！
 はい。

音楽4。

私 母は不機嫌なまま出て行った。

コロス 不機嫌の理由その1、父の優柔不断と浮気のウワサ。
 不機嫌の理由その2、姉への疑いと妄想の跳躍。
 不機嫌の理由その3、

私 ボク。

コロス へびを捨てないから。
 地域活動に参加しないから。
 教職にたいして後ろ向きになっていること。
 彼女がいないこと。
 モテないこと。
 ヤル気の見えないこと。
 エトセトラエトセトラ、エトセトラエトセトラ、

(4)

音楽4、消えてゆく。

その日の昼前、というには少し早い時間。

コロス ボクはトリカゴを抱えて庭に出た。
 旧家であり、敷地もそれなりである。
 あの場所へと迷いなく、目的のポイントへと向かう。
 へびの眠るトリカゴが誰にも見つからないと思えるあの場所へ。
 その、まさに目的のポイントでボクは、意外なものを目にした。

そこには、含み笑いを浮かべながら地べたに横になる男がいた。

私 ・・・だれ。

男 私 おお・・・見つかってしもうたか。

微妙な沈黙。

警察呼びますよ。

いやそれは堪忍。

こんなとこでなにしていた。

(ニヤリと笑って) シュンヤ、大きくなったな。

・・・もしかして、・・・あれっ？

ひさしぶり。驚かしたか。

・・・東京の伯父さん？

そうや。

驚かされましたよお、

すまん、こんなとこで。みんな元気にしてるか。

あ、はい、みんな元気になっています。

そうか、そら良かった。それは？

あ、これ、トリカゴ、古いミカン箱で作った、

ほう。

ジュウシマツを飼うてたんやけど、まあ・・・あの、あがってくださいよ。

どうしようかな。

ボクひとりなんです。

そうか。

母は昼過ぎには帰ってきます。父は仕事で、夕方には、

盆も仕事かいな。お役所勤めは厳しいなあ。

姉は旅行で、今日は帰ってけえへんと思います。

ヨリコちゃん。

はい。あの、服、汚れてますよ。

こんな格好であげてもらおうわけにはゆかんわ。

大丈夫ですよ。

いやあ、

あの、ここで、

おお、ここで寝た。終電でツダの駅に着いたもんでなあ、そんな時間に顔だすのも

ちよっとどうかなあと。ワシ、アオカンは慣れてるんや。

アオカン？

青天井を館とすること。あ、別の意味もあるけどな(と笑った)。

はあ、そうですね。

シュンヤは盆休みか。

夏休みです。大学生、四年。

伯父 ほたら就職やなあ。

私 はい。伯父さん、あの、やっぱり、あがってください。冷たいもん出しますから。
伯父 うーん、

クロス 少し躊躇はしたが、

伯父 そやな。

私 あの、伯父さん、ちょっと待って。これ、ここに置いと思うて。いや実際には置いとく、というより、隠す、です。中にね、へビが居るんです。
伯父 へビ。

私 母がいやがるんで。捨ていゆわれたんですけど、

伯父 ジュウシマツは、

私 それをコイツが呑んでもうて。入ったはええけど腹の中のジュウシマツがコブになつてつかえて、

伯父 ほおっ、

私 出られへん。ドジなへビです。

伯父 飼うんか、ここで。

私 まあ、しばらくは。よお見たらカワイイ顔してますよ。

伯父 シマへビやなあ。

クロス

トリカゴの中身の正体を知ったとき、伯父さんの顔が輝いた。

その瞬間、ボクは伯父さんと共犯関係の条約を締結したのだ。

トリカゴをそこに隠したことを、伯父さんは決して家族にはしゃべらないと確信した。

ふたり、家の中へ入った。

伯父 あそこは家（うち）の敷地内の死角やからなあ。

私 はい。

伯父 ワシもこの家（いえ）にいたころ、よおあそこに隠れて悪いことしたわ。

私 ええっ、どんな悪いことしたんですか。

伯父 そんなこと、オマエ、ゆわれるかいな。

私 あははっ、そらそうや。伯父さんは今回こっちなになを、

伯父 なにて、別になんにもないんやけどな、ちょっと懐かしなつてな、大阪に出てきた

ついでにな、自分の育った家（いえ）、今はどないなってるかなあて感じで。アカンな、年取ったら、ノスタルジー、やな。

私 ボク、前、伯父さんに会ったの覚えてますよ。

伯父 ああ、あのときな。

私 中一でした。ええっと、今から十年前。あのときの伯父さん、ちょっと怖かったなあ。

伯父 なんて、ワシ、なんも怖いことしとらんやろ。

私 そやけどなんか顔つきが厳しいというか、

伯父 そやったか。

私 伯父さんの学生時代の話、聞いたことあったからかもしれんけど。

伯父 シュンヤのお母ちゃんから聞いた話やったら、ろくでもないことばかりやろな。

私 せっかく東京のええ大学に入ったのに、勉強せえへんで学生運動ばかりやってたて。

伯父 (にやにやしている)

私 ほんで、逮捕されたこともあるんでしょ。

伯父 親不孝もんやな。

私 逮捕てゆうても、ね、窃盗とか殺人とかとちやあうから。

伯父 殺人、ははは、

私 政治的な活動やからな。ほんで、中退してもうて、就職もせえへんかったんでしょ。

伯父 もったいないで。官僚にもなれたんとちやいますの、あの大学やったら。

私 いたこともあるんやで。

伯父 そうなんですか。どんな？

私 まあそれはええやろ。

伯父 え、なんで。

伯父 また話すから。

私 なんかなあ、

伯父 そうして今は、労務者支援の仕事。ボランティアみたいなもんや。ったく、だれかワシを支援してくれ。

私 (ちよっと困ったという顔をした)

伯父 ああ、気にするな、冗談や。ナミエにこの家(いえ)継いでもらうときに、遺産の相続放棄してるから。心配ないで。

私 はい、それも聞かされてあります。

伯父 あのころな、もう十年経つんやな。神戸か泉州かで、もめてたころな。

私 もめてた。何がです。

伯父 新空港のことや。

私 はあ、

伯父 神戸は新空港反対の市長が、推進派の対立候補を退けてな、再選して神戸での新空

港案は一旦完全に消滅したんや。ところがや、周辺都市にくらべて都市開発に遅れをとるとかなんとか、商工会やらが言い始めて、市長も市議会も、空港推進派に寝返ったんや。全会派がやでえ。革新系のふりをしとただけやったんやな。政治家なんて信用できるもんやあらへん。何でやと思う。

私 そら、お金でしょ。都市開発イコール莫大なお金が動きます。

伯父 利権がらみよ。ここらはここで、神戸はいったん新空港誘致を蹴ったくせに、なんちゆうことをぬかすんやうなことな、大いに巻き返しを図った。

私 はい、

伯父 そやけど国は神戸が蹴った時点ですでに泉州沖に決めてたに違いないんやな。

私 はあ、

伯父 その時点でもう途方もない金が動き始めてるのや。今更その動きは止められへん。

私 関西の巨大企業、わかるやろ、

私 はい、

伯父 利害関係はそいつらと運輸省、それに大阪府が人事権を握るわな。予算は大蔵省や。ここらの推進派の議員らとつるんで決まってゆくんや。

私 うーん、

伯父 環境アセスメントなんかあんなもん信用したらあかんで。そらもう出来レースや。

騒音、大気汚染、大阪湾の水質汚染、潮流の変化、そんなもん、泉州沖推進派の都合のええようにできあがる。

私 そういふもんですか。

伯父 そういふもんや。ほんでな、神戸はな、兵庫県とつるんで、泉州沖建設は絶対に認めんちゆうてネガティブ・キャンペーンをはるわけや。その結果、どこのつまりは、

私 どうなるんですか。

伯父 知らんか？

私 何をですか。

伯父 知らんか。

私 知りません。何を知らんかも知りません。

伯父 泉州沖の新空港建設に神戸市が同意する、ということの交換条件に、将来、わがところにも新空港の建設をて要求が通るわけや。

私 神戸にも新空港ができるんですか。

伯父 そうや。シュンヤ、大学生やったら新聞読まなあかんぞ。

私 はい。伊丹（の空港）も残るんでしょ。伊丹、泉州沖、神戸て、そんなに空港ていらんでしよう。

伯父 だれかが金を儲けるためにいるんや。泉州沖でもよおけのにわか漁師が、漁業補償やゆうて騒いどったやろ。知ってるか。

私 はい、凄い大金が支払われたそうです。

伯父 あれはな、そんな条件飲めるかあ、って大声で怒鳴って、交渉のテーブルをガンガン叩いたら叩くほど釣り上がっていくんや。

私 そんなもんですか。

伯父 そんなもんや。

私 恫喝を肯定するようなもんですね。

伯父 未成熟な社会やちゆうことやな。理不尽な世の中や。どや、そんなもん破壊してみる気はないか。

私 ハカイ、

伯父 ドカーン、や。

私 ……。

伯父 あっはっはっは。

私 はは…、

伯父 そういうこと考えてるやつ、世の中にはいっぱい居るで。

私 ボクはまた新空港を破壊するんかと、

伯父 (声を押さえて) それも含めてや。

微妙な間。

私 開港にあわせてですね、関西新空港開港記念五百円白銅貨 ちゆう長ったらしいのんが発行されるんです。

伯父 ほう、

私 新聞読んでないんですか。

伯父 あははっ、

私 ボク、予約しちゃあるんですよ。お父ちゃんにゆうて。

伯父 そらなんか公務員とカンケイあるんか。

私 町と取引のある金融機関に頼んでるのは間違いないんです、はい。

伯父 優先的になんぼでもまわしてくれるっちゆうわけやな。

私 そんなふうを考えられます。しかも銀行から役場にお届けしてもらう、みたいな、

伯父 それについては、シュンヤはどう思う。

私 なんか恥ずかしいことのような気がしてきました。居心地の悪いような、お尻がむず痒いような、

伯父 それでええ。どうせそんなもん欲しがるやつ、そんないるわけない。

音楽 5。

クロス 捕食と被食のエネルギー循環、

生産者消費者の食物連鎖、
血脈（けつみやく）を絶やさぬための凄絶で神聖な闘争がある。
シマヘビはチーコを捕食することに命を懸けただろう。

私　ボクはヘビを食べるわけじゃない。

コロス　ボクの手の内にあるその命は、今は何を思う。

伯父さんのことをもっと知りたいと思った。

伯父さんはボクのなかのなにかを強烈に突き動かす。

（5）

音楽 5 消えてゆく。

その日の、夕食後。

父、母、伯父さんと私。

伯父　ガッチョが食えるとは思わなんだなあ。

私　ガッチョが好きやったんですね。

伯父　懐かしいわ。関東ではな、高級魚や。ネズミゴチゆうねん。

母　こっちでも高級魚やで。昔に比べたらもう高い高い。

父　泉州沖の埋め立て以降、捕れへんようになったみたいですわ。

伯父　安うて美味しい魚やったんやけどなあ。

微妙な沈黙。

母　兄ちゃん、今、どこに住んでるん。

伯父　横浜や。

母　どんな仕事、とか聞いてもええん。

伯父　ああ、寄せ場の労働組合や。

母　ふうん。寄せ場で危ないことちゃあうん。

伯父　なにが危ないんや。

母　いや、いろんな人がいて、

伯父　ヤクザとケンカせなあかんときもあるけどな。

母　ほらやっぱり、そんなオソロシイところ。

父　役所ともいろいろあるんちやいますの。

伯父　まあ、ありますけど、市の職員の方がたとはそれなりに、仲良うやっていますよ。

父　そうですか。そらよかった。

伯父 持ちつ持たれつのところがありますから。
父 なるほど。

母 ほんで墓参りは、
伯父 済ました。

私 一緒に行こうゆうたら、伯父さんゆうべのうちにいったんやて。

伯父 月明かりが美しかった。

母 そう。

伯父 キレイにしてくれちゃあるな。夜でもそれはわかった。

母 お盆やから。

伯父 お母ちゃん(祖母)には心配かけたしな。

母、ちょっと困ったような表情になった。

伯父 (私に)学生の頃、よお手紙書いた。お祖母ちゃんにな。

私 そらええことやないですか。

伯父 なにゆうてんねん。

私 . . .

母、立ち上がり、

母 ほな、兄ちゃん、二階に布団敷いとくしな。

伯父 ああ、元のワシの部屋やな。

母 いや、そこは今はシュンヤの部屋になってるし、

伯父 その隣か。

母 そう。

父も、母につられるように立ち上がり、

父 ごゆっくり。

伯父 どうもすみません。お世話かけます。

母、父、消えた。

少しの間。

私 伯父さん、ビールもう一本開けよか。

伯父 いや、もおええわ。よお手紙書いたのはな、金の無心や。ナミエも知ってんねやろ

私　な。運動で忙しかつてな、アルバイトをする余裕ものうてな。情けないやろ。
私　・・・そやけど就職したんでしょ。
伯父　仕事せな食っていかれへん。生きてゆけんわな。拘置所を出てからな、こらもうこのままではあかんと思うてな、仕事を紹介してもらうた。それがちよっとおもしろい仕事でな。
私　おもしろい仕事、ええですね。
伯父　シュンヤは就職は、
私　悩んでるんです。このままやったら先生になってしまふ、中学校の。
伯父　ええやないか。
私　それが今は自信ないんですわ。ただの安定志向やったんです。ほんまに先生でよかつたんかどうか。
伯父　デモシカ先生ゆうてな。先生にデモなろうか。先生にシカなられへん、みたいな。教育学部なんですよ。
私　最初からやる気満々やないか。
伯父　教育実習、散々やったんですよ。
私　マリッジ・ブルーみたいなのも違うんか。
伯父　学校崩壊してるんですよ。授業中も生徒の出入り自由みたいな。ボクの授業なんか馬鹿にして聞いてくれません。
私　そんな生徒ばかりやないやろ。授業のじやまするやつらにはガツンといかな。なんかねえ、中学生にしてヤクザとつながってるようなグループもあるみたいですよ。そうか、伯父さん、ヤクザともケンカするんですしたよね。
伯父　そら労働条件を守らすためや。搾取や暴力手配師とは闘わなしゃあないやろ。
私　闘わなしゃあない・・・。
伯父　シュンヤが教育実習に行った中学みたいなんばつかしとは限らんやろ。
私　ニシ中です。
伯父　え、ニシ中、
私　ツダの。
伯父　ワシらの頃はツダ中ひとつだけしかなかった。
私　そのツダ中が、今のニシ中です。オクボの方にヒガシ中ができて。
伯父　そうなんか。
私　そうなんです。もう最悪の中学校です。
伯父　先生をなめてかかっとなのやのう。
私　それに、先生ちゆうのもアレですね、ただの職業のひとつにすぎんかったのやなあと、
伯父　なんや夢みてたんか。
私　自分には向いてなかったような気がしてきて、醒めてしまいました。生きがいのあ

る人生で、いったいこの世のどこにあるんか、見当もつきませんわあ。

伯父 (にやにやしている)

私 ほんで、どんな仕事ですか。

伯父 映画や。

私 映画！

伯父 びっくりしたか。これでもフランス映画に詳しいんやで。ヌーベル・ヴァーグや。

私 ボクも、ゴダールとか、トリュフォーとか、名前くらいやったら知ってますよ。

伯父 お、

私 いやホンの名前だけ。見たことないです。すいません。むつかしそうやから。ほん

で、どんな映画つくってたんですか。

伯父 ……「好色(秘)女体天国」、

私 ……、

伯父 「未亡人クラブ・熱いためいき」、

私 ……、

伯父 「団地妻・不倫のもだえ」、

私 ……、

伯父 ピンクって知ってるか。

私 あ、はい(うなづいた)

伯父 学生運動の仲間から紹介されてな。

私 へえっ、

伯父 助監督の、下の下のまた下。要するに使えばしりや。警察の許可を得んと街なかでロケをやったりな、テレビ・ドラマの撮影ですてウソついたりしてな。どんな女優さんが出てますかあて訊かれたら、八千草薫さんですって、んなわけないやろ。会わしてくださいよおゆわれたら、いやあ、このシーンには出てないんですよお、ってな、ウソばかりついてマシタ。あ、そやけどこれは正社員やなかった。アルバイトや。こき使われても楽しかったんやけどな。

私 都会やないとだけへん仕事ですね。

伯父 そうやな。

私 ほんで、就職先はどんな会社ですか。

伯父 ピンク映画つながりで出版社や。

私 ピンク映画つながり、…もしかしてエロ本ですか。

伯父 そうやエロ本を作ってた。そういう出版社。

私 へえー。

伯父 編集長、てゆうてもな、カメラマン以外の仕事は全部ひとりやろ。

私 自販機とかに入ってた、

伯父 シュンヤも買うたか。

姉、いつからか帰ってきていた。
不機嫌そうな顔をしてそこにいた。

私 あれっ、姉ちゃん。帰ってきたん。
姉 帰ってきたら悪いか。
私 どないしたん。

姉 . . .
私 東京の伯父さん。あ、今は横浜か。
伯父 やあ、ヨリコちゃん、
姉 こんにちは。土産、明日渡すわ。疲れた。もう寝る。
私 おおきに。ほな、おやすみ。

姉、さっさと消えた。

私 ケンカでもしたんかな。婚約者と旅行に行ったはずなんやけど。姉ちゃんこそマリ
伯父 ヅジ・ブルーちゃあうか。

私 さっきのハナシ、せえへんほうが良かったかな。
伯父 いや、そんなことないですよ。伯父さん、ほんで、そのピンク映画つくったり、エ
ロ本つくったりしてる人で、どんな人らなんやろか。

伯父 こんな。
私 そうやのうて、
伯父 ワシからしたら普通に見えるんやで。映画を好きな連中が集まってるだけや。映画
つくってることが楽しいんや。みんな、儲かれへん仕事を汗水たらして寝る間も惜
しんでやってる。エロ本は、そのまま一定数は確実に売れるところをみたら経済的
な営利活動やといえんことないやろうけど、そんなに儲かるわけでもないしな。
要は、好きなんやろな。

私 エロが、
伯父 エロが好きでやってる人もそら、中にはいるかもしれんけど、つまるところ自己表
現がや。

私 エロが、自己表現になるんですか。
伯父 レジスタンスやな、抵抗それ自体が自己表現や。そういうもんを闇に葬ろうとする
世間の目や、権力への反骨精神やな。まあ、今の表現方法ではウーマン・リブの人
らに叱られるやろうけど。うん、女性用のエロがあってもええんや。どや、そう思
わんか。
私 そうです。

伯父 ええことに気がついたなワシ。

私 売れますか？

伯父 売れへんやろな。まずその環境が無いわ。

私 販売方法を考えんといけませんね。例えば少女漫画誌の大人版みたいなやつあるで

しよ、ああゆう体裁にして、表紙は、こう、ソフトに、

伯父 シュンヤ、えらい熱心やな。

私 あ、いや、伯父さんにノセられて、あはは、

伯父 はみ出し者や。

私 えっ、

伯父 落ちこぼれや。

私 . . .

伯父 学生運動くずれやら、文学青年のなれの果てやら、アングラ芝居やってるやつ、社

会にうまいこと適応でけへんかったり、反抗心を持たざるを得んような境遇のや

つ、そんなやつらの行き着き先の地獄の二丁目。そこがワシの生きている場所や。

そこへ流れ着いたもんはまた仕合わせや思う。どこへも行きつくことのできんやつ

はこの世にわんさかおるで。

私 はあ、

少しの間。

伯父 ワシなあ、死んでるんかもしれん。

私 死んでる、

伯父 ゆんべ、墓からでてきたんや。どや、ワシ幽霊に見えんか。盆やし帰ってきたんや
で。

私 . . .

伯父 いや、悪い冗談ゆうた。すまんな。

私 いえ、

伯父 迷うてんのや。迷うてついふらふらーと、もう帰らんと決めていた家（いえ）へ帰
ってきてしもうた。幽霊は悲しいなあ。グチをゆうだけしかできん。せめて怨霊に
なって祟りたかったわ。

音楽6。

クロス 伯父さんが怨霊になって祟りたかったのはなんなのかはわからない。

私 ボクは、なににも決して屈しない強さで身を包んでいるように見えた伯父さん

が、思わず心の裡をもらしたようで切なかった。

クロス 伯父さんがどうしてツダに帰ってきたのか、気になり始めた。

(6)

音楽6、消えると、舞台には父と母。

母 兄ちゃん、なにをしに帰ってきたんやろ。なんや気持ち悪いわあ。

父 血を分けた兄妹がなにゆうねん。

母 目的がわからへんから。

父 墓参りちやあうんか。

母 夜中に墓参りて、幽霊やないんやから。

父 幽霊が墓に参るか。知った人に会いたなかつただけやと思うな。

母 とんでもないことゆいでしたらどうしよ。

父 とんでもない、

母 金を貸してほしいとか。相続のことを蒸し返されたりしたら、

父 キヨシさんの性格からしてそれはないと思うで。そやけど、もしホンマに困ってて家(うち)へきたんやったら、ちよつとぐらいは融通してやんのも兄妹のつとめやろ。

母 考え込むわ。

父 自慢の兄さんやったんやろ。

母 大学に入るまでは、や。ワタシには理解できん。

父 男のロマンを追い求める人やねん。オレらみたいになちっぼけな地方公務員とはちやあう。

母 男のロマンで。ほんでアンタもロマンを追い求めてるわけか。

父 何がいたいんや。

母 アンタ、ウワサになってるで。

父 オレ、ウワサの男。

母 ふざけやんと。覚えあるんやろ。

父 なんの？

母 空とぼけてんのか、

父 そやからなにを？

母 あー、もうイヤ。

父 なにがや。

母 アンタ浮気してるやろ。

父 オレが、

母 ヨリコが聞いてきたんや。
父 オレが浮気してる、
母 ムラのもんでそんなことゆうてる人がいるんや。ヨリコに直接告げ口したらしい。
父 ろくでもないもんがいるもんやのう。
母 アンタにそんな度胸がないことはワタシがよお知ってる。
父 そうや、そやけど、そんなところにチカラ込めんといてほしいな。うーん・・・、
母 アンタなに考え込んで。思い当たるふしでもあるんやないやろな。
父 アホな、だれがそんなことをゆうんやろなあ、と思て、
母 ゆおか、・・・ヒコタロウや。
父 チアキか。あー、アイツやったらしやあないな。そうか、そうやったか。
母 そうやったか、て、アンタなにを納得して、思い当たるふしがあるみたいやないの。
父 ちやうちやう。
母 そんなみっともないウワサされるようなことはせんといてよ。恥かし。あっちもこ
父 っちも、もう、頭が痛い。
母 あっちもこっちも。こっちはオレや。ほんであっちは、だれやねん。
父 ハヤシ先生。
母 ほう、
父 結構遊んでるて。
母 そんなん男やったらだれでもや。
父 なんかアヤシイとこに通てるみたいな、
母 アヤシイとこて、
父 知らんよワタシは。
母 ……、
父 兄ちゃん、いつまでおる気なんやろか。

音楽 7。

翌日の午前中。

盆踊り大会の開催される日である。

クロス

和泉山脈を臨む地域 一帯は、

浄瑠璃語りをルーツにもつ横山口説きで先祖の霊を迎える。

ツダの町では今日明日（あした）がその日だ。

母は婦人会の役員で盆踊り大会の準備。

父は今日も仕事があるらしく出かけている。

ボクは鳥カゴの中のヘビの様子を偵察した。
シッポの先がブルブルと震え、ふたまたの赤い舌がチロチロと踊った。

(7)

音楽7が消えると舞台上に私と姉。

姉、こわばった表情で土産の箱を手にして立っている。

微妙な沈黙があつて、

買ってきたで。

あ、ああ、ありがとう。

私 姉

箱を受け取った。

これ、な、醤油とんこつの、

．．．．．、

．．．姉ちゃん、どないしたん。

東京の伯父さんは？

出かけてるけど、

そう、

なに、

朝、早いんやな。

え、ボク？

違う、伯父さん。もお帰ってけえへんわ。

なんで。荷物、置いちゃあるで。

ふうん。

着替え程度やけどな。もともとそんな荷物持ってへんかったし。

やっぱり。

やっぱりて、

(強い調子で)もおわけわからんわあ。

どないしたん姉ちゃん。

．．．、

なあ、ゆうべからオカシイで。先生となんか、

アイツは関係ない。

アイツ、

私 姉

間。

姉ちゃん！

ワタシ相手にいやらしいこと想像してんのか。どんな想像。それでワタシの下着が必要なん。なんや怒ってんのか。そら怒るわな。ホンマのことゆわれたら。

なんでそんなことゆうんや。姉ちゃんどないしたん。

妄想ばかりしてんとワタシの胸触ったらええやん。ほらっ、揉んでみたらええやん。シュン、ほらっ、ここにあるで。ほらっ、シュン、

姉、胸を突き出した。

睨み合うふたり。

じりじりと姉の胸に両手を伸ばす私。

姉、ちよっと怯んだような表情になった。

私
ドカーン！

と、叫び、しゃがみ込んだ。

姉、私から飛び退いた。

姉
な、なに、

わずかなタイムラグがあつて、

母
なんやビックリするやないの。

母がその声とともに入ってきた。

母
ドカーン、やて、おおこわ。

ふたりのただならぬ様子に気づいて、

母
えっ、ふたりとも、どないした。ええ歳して姉弟げんかか。

姉、二階へ速足で消えてゆく。

母
シュンヤ、アンタお姉ちゃんになにした。

私
・・・、

母
シュンヤ。

私 先生になんかなりたないわあ。
母 なにをつ、甘えたことゆうんや。

私 ……
母 ……ヨリコっ、ヨリコっ…、

と母、姉を追って消えた。

私 呑み込まれる。呑み込む。呑み込まれる。呑み込む。ボクはチーコである。ボクはシマヘビである。チーコでありシマヘビである。ああそうやった、ボクはまだ山登りの途中やったんや。とするとボクはつまり、チーコではない。とするとシマヘビであるにちがいない。呑み込んだのはボク。名前のないシマヘビ。

クロス ジュウシマツは人の手によって作り出されたペットとしての鳥だ。性格はおとなしく温和で飼育するのは極めて簡単、初心者向けの飼い鳥だ。だれだって飼い馴らす。

飼い馴らされる。
満員電車さながら鳥カゴいっぱい押し込められても、ケンカもせずに仲良く暮らす。

ペットとしての存在ゆえ、トリカゴから脱け出して飼い主の手を離れてしまったら、いき、て、ゆ、く、こと、が、で、な、い。
私 チーコはもともと生きることのできひん鳥やったんや。

(8)
その日の夜。

食卓のある部屋。

遠く横山口説き（音楽8）が響き始める。

父、母、姉、私が、なんとも言い難い難い緊張感と距離のバランスで座っている。

父 あ、始まったな。

バツの悪い間。

母 （だれにともなく）そやからお母ちゃんが悪かったて、

姉 ……、シュン、なんであんなウソゆうたん。

私 ……、

父 イチローさんやな。ツダ一番の名人やで。やつぱりな、まずドあたまは、名人から始めてもらわんとな、締まらんわな。

だれも反応しなかった。

姉 シュン、おかしいやろ。

私 伯父さんに謝れよ。

姉 ……、いてないやん。

父 まあまあ、ヨリコの誤解も解けたことやし、幸いキヨシさんもなんも知らんこつちやしな、まあ、あえてキヨシさんに報告することでもないやろ。

私 姉ちゃん、伯父さんの荷物調べたんやで。

父 そらいかん。そらいかんけど、シュンや、ヨリコをしたことはキヨシさんには黙っ
といたってくれ。

私 ひどいよ。

母 そやからお母ちゃんが悪かったてゆうてるやろ、もおっ。

父 オマエが逆上するな。

母 あんなパンツ信じられへんわ。

父 気に入らんかったらしい。

姉 みんな穿くよTバックくらい。

母 みんなでだれ。マコちゃんも穿いてるんアレ。あんなヒモみたいなもんがパンツの
役目できるん。

姉 下着のラインがでえへんや、ジーパンやタイト・スカート穿いたときに。

私 私 確かに女子のあのパンスジ、カッコ悪いよなあ。

姉 な、思うやろ。

私 うん思う。

姉 それにな、あのカタチが仙骨のツボを刺激して、・・・仙骨ってここ、生理痛や冷え性や足のむくみを予防してくれるの。おまけにリンパを圧迫させへん仕組み。そのうえヒップアップ効果まであるんや。

父 ええことだらけやな。

私 さすが姉ちゃん、Tバックのセールス・レディできるな。医者（のところ）に勤めてるだけあって説得力あるわ。歯医者やけど。

父 （母に）オマエも穿いてみたらええんちゃあうか。

母 いや。あんないやらしい下着。

姉 そんなんちゃあう。

私 お母ちゃん色眼鏡で見すぎやわ。

父 健康にええんやぞ。

母 ハヤシ先生に、ヨリコがへんな女やと思われたなかつたからやろ。

姉 へんな女てなによ。

母 へんな女はへんな女や。

父 オマエが逆上するな。

私 古いでお母ちゃん、

母 ああ、古いよ。古漬けやよ。そんな、なんたらっちゆうもん、

姉・私 Tバック。

母 ああ聞くのもイヤ。ワタシはよお穿かんしな。

父 だれが穿けっちゆうた。

母 アンタや。

姉・私 （母と同時に）お父ちゃんや。

父 ！

母 見るのもイヤやったんやわ。

私 ボクかてお母ちゃんがTバック穿いてるのは見るのもイヤやわ。

母 わが子に見せるもんちゃあう。

父 やっぱり穿くんかい。

母 穿けへん。

姉 Tバック穿いたらへんな女で、偏見に満ち満ちてるわ。

私 ま、セクシーはセクシーやけどな。

母 そ、そ、そこが、セクシーやっちゆうのんが、

私 それが偏見。

母 もうみなでよってたかってワタシのことを、

父 コラッ、オマエらもうお母ちゃんをいじめんな。な、捨ててへんかったんやから、

母 な、ヨリコ。

姉 危機一髪やったわ。

父 ほなもうこれで、な、すんだすんだ。ナミエ、踊りに行かなあかんのやろ。何時か
らや。

母 8時前に会館に集合。

父 うん、ほたらもうすぐやな。チアキにも会うか。

母 そら会うやろな。

父 わろて聞き流したらええ。アイツ知ってんねや。

母 なにを。

父 来年早々にオレらの学年の同窓会をやるちゆうことになってな、

私 ツダ中の、

父 おお。どの年度の卒業生でも、初めてやるときは役場に勤めてるもんで進めていく

私 ことになってるらしいわ。

父 お父ちゃん幹事なんや。

私 そうやねん。ほんでな、ナカタニさんと時どき喫茶店とかでな、ミーティングして

父 ンねん。チアキはな、ナカタニさんがオレの初恋の人やったちゆうのを知ってるん

やなあ。ほんで、からかいたなるんやと思うで。

姉 あ、わかった。チアキさんはお父ちゃんのこと、

父 アホゆうな。

姉 いやきっとそうやわ。

母 お父ちゃんモテたことあらへんで。

姉 ジュリーみたいやったって、

母 そら髪の毛だけ。

父 キヨシさんは今晚帰るんやるか。

母 泊ってくるかもしれんゆうてた。

父 それは帰ってくるかもしれんゆうことやないか。

母 兄ちゃんはこの時間や、帰ってくるにしてもどっかで晩ご飯は済ましてくるやろ。

父 ゴメンやで、晩ご飯もちやんとよお作らんと。

母 和歌山ラーメンがあるで。姉ちゃんが買うてきてくれたやつ。

父 ほな、そろそろ、行ってくるわ。ワタシ踊るのちっとも楽しめない。

母、出かけた。

父 さて、風呂に湯ウでも入れてこおかな。横山音頭を聴きながら湯船にのんびりつか
るちゆうのんもまたええもんやと思わへんか、なあ。あ、
どないしたん。

私 音頭取りが名人からヘタクソに変わってもおた。

玄關ベルが鳴った。

姉

あ、・・・

私

ハヤシ先生やできっと、

姉

シュン、出て、

私

え、ボクが・・・、

音楽 8 から音楽 9 へとクロス・フェード・チェンジ。

クロス

噂をすれば影がさすのコトバどおり、

ハヤシ先生が神妙な面持ちでそこに立っていた。

姉は終始不機嫌な態度で接していた。

ハヤシ先生は旅先での解放感からか、

まるで自慢話のようにフウゾクの話をしながら姉の胸に手を伸ばしてきたらしい。

バカだ。

ボクは姉の尻に敷かれるハヤシ先生の行く末が想像できて可笑しかった。

私

伯父さんはその二日後の夜に消えた。

その日ボクは教員採用試験最後の面接で、

家（うち）へ帰ったときにはもう、伯父さんの姿はなかった。

盆の入りに現れ消えたボクの風の又三郎。

クロス

トリカゴの中のへびも伯父さんと一緒に消えてしまった。

音楽 9 から音楽 10 へクロス・フェード・チェンジ。

(9)

私は山道を歩いている。

私

夜明け前の雨恋山登山道。

大地を踏みしめる。

地虫の低く響く声如山裾に吸い込まれてゆく。

杉木立に囲まれた木製階段を登りきるとその先は、山頂へと二気の急勾配だ。

息を切らせながら、覆いかぶさるシダ植物の森に踏み込んだボクは、

幽かな人の気配を感じて振り返った。

私 伯父さん。
伯父 先はガレ場や。氣をつけて行けよ。
私 はい。

クロス ボクは伯父さんに出会ったことになんの不自然さも感じなかった。

私 すぐに開港式です。

伯父 そやな。

私 先日は記念式典がありました。このところ泉州 一帯は騒々しいです。空港に 一万人集まってだんじりを曳きました。

伯父 滑走路をかい。

私 滑走路とはちやあうかったみたいですよ。皇太子と雅子さんがきて、

伯父 だんじり曳いたんかい。

私 曳いてません。ずっとお祭り騒ぎで、(申し訳なさそうに)ボクも開港記念の五百円白銅貨を買いました。

伯父 ゆうてたのう。

私 泉州から世界へ羽ばたくっちゅう感じのえらい威勢のええデザインです。

伯父 そうか。

私 そやけどなんか軽いですよ。なんで買おうと思たんか。

伯父 そんなもんや。

少しの間(歩いてる)。

私 伯父さんが帰ったら仏壇の前に三十万。

伯父 借りたもんを返したんや。

私 お祖母ちゃんにですか。

伯父 ああ、やっと、返すことができましたわ。

私 お母ちゃん大騒ぎ。

伯父 アイツは昔からなんかあったら大騒ぎや。

私 どないして返そうて。

伯父 返したもん返されても困るなあ。かたき討ちに行つて返り討ちにされるみたいなもんやないか。

私 そうです。

伯父 うん、シユンヤへの就職祝いや。

私 多すぎます。それにお母ちゃんがそれを許しません。

伯父 そうやのう。

少しの間（歩いている）。

私 釜ヶ崎はどうでしたか。

伯父 夏祭りの盆踊り大会でな、何人もの懐かしい顔に会うてきた。

私 何人も。

伯父 そう、関西出身のものもそれ以外のものもな、新空港ができるっちゅうことな、万博以来の好景気やあ、ゆうてこっちゃへきた。そやけどな、みんな年取ってるんや。せっかくの新空港建設の求人も、大型機械の導入と雇用形態の変化で、年寄りなみはみなアブレてまう。野宿するもんが増える。当てが外れたもんも多かつたやろな。結局ええ思いましたんはゼネコンだけっちゅうことや。開港して仕事の口が減っていったら、あとは、ちりぢりばらばらになっけてゆくか、野垂れ死ぬか、伯父さんの仕事はさういう、労働者の人たちを助ける仕事ですよな。他人を助けるとかやのうて、自分のこととしてや。

私 なるほど。

少しの間（歩いている）。

私 新しい太陽に背中を暖（あつた）められて、ボクは誰かに後押しをされているかのようです。

伯父 え、なに、ワシはな、なんや山のてっぺんからふいっと宙に浮かびそうで、

ああ、やっぱりもう、幽霊になってもうたんなあ。

私 又三郎ですよ。

伯父 マタサブロウ？

私 風の、

伯父 風かあ、

ふたり、山頂へと立った。

陽光がふたりの背中を金色に輝かせる。

音楽 10 から 11 へとクロス・フェード・チェンジ。

私 新空港が見えます。労働者が埋め立てた人工島（じんこうじま）。まるで空母みたいです。

クロス 関西国際空港開港の朝。

雨恋山山頂から見下ろす空港島（くうこうじま）は異様な姿でその身体を鈍く光ら

せている。だがしかし、

その先には果てしなく空（そら）がある、世界がある。

ここにはいないはずの伯父さんと、神宿る山より望むその島で、

一九九四年九月四日、夜明けとともに開港式が執り行われる。

午前五時五七分、テープカット。

くす玉が割られ、鳥がはばたいた。

（客席に背を向けて）バンザイ、バンザイ、バンザイ、

私

あつという間にターミナルは人でごった返し、滑走路には各国のジェット機が勢ぞろいをするだろう。明日（あす）には特別飛行のコンコルドも着陸するそうさ。しんと静かな雨恋山山頂でボクは思う。ボクはヘビだ。生きてゆく、生活するという残酷さと滑稽さを、身を持って体験したシマヘビなのだ。

伯父さん、ヘビが逃げました。トリカゴの中のヘビが。

伯父

そうか。

私

ジュウシマツを呑んで隙間から逃げ出せなくなってしまったボクは、ジュウシマツを消化して、溶かして、自分の血と肉にして、歪なユブを抱いた姿から新しく生まれ変わったボクになって、そうして、自力での脱出に成功したのでした。これもまた滑稽な人生の一幕（ひとまく）。それもこれも自分が自分として生きてゆくための。

伯父

そうか。

伯父、消えてゆく。

私

伯父さん、伯父さん、・・・伯父さん、・・・ありがとう、

私は消えてゆく伯父さんを見送った。

クロス

（客席に向き直って）まもなくグアムからの臨時便の到着です。

関西国際空港開港第一番機として、

真新しい滑走路へと着陸いたします。

（客席に背を向けて）バンザイ、バンザイ、バンザイ、

私

そのときボクには見えた、頭上を覆う巨大な鳥の姿。ボクには聞こえた、耳をつんざくジェット機のエンジン音。

コロス バンザイー、バンザイー、バンザイー、

ジェット音が耳をつんざく。

コロス バンザイー、バンザイー、バンザイー、

再びコロスたち、反転して客席を向くと、そこには厳しい表情がある。それは何らかの意志であり決意を表明している。あるいは、怒り、でもよい。音楽11カット・アウトされ無音となる。

コロス（そっとささやくように）ドカーン。

しばらくの余韻である無音の後、音楽12がスネーク・インする。

私

空港島が木っ端みじんに碎け散る幻想。
ボクの視界を遮っていたひと時の霧が晴れ渡るとそこには、
この手で掬い取れそうな大阪湾が広がり、
朝の陽射しにきらめく青い地球にひとつ、ボクという名のストリームがあった。

コロスたち、それぞれが演じた役の人物として、私に何かを語りかけたような表情を残し消えてゆく。姉、父、そして母として。

清流を両手に受け（大阪湾から掬い取るのだ）顔を洗うシユンヤ。
清々しい表情だ。

音楽12が高鳴り、ここにドラマはひとつの終止符を打つ。
舞台はいったん暗黒となる。
了。

※モデルとなった山の頂には、雨山龍王社という水の神さまが祀られている。

※台本中の「音楽」のイン&アウトは、作者の演出プランによるものである。

上演記録

①遊劇体第六十二回公演

2019年十一月二十一日から二十四日

京都・THEATRE E9 KYOTO

出演 松本信一(私)

坂本正巳(父)

大熊ねこ(母)

久保田智美(姉)

村尾オサム(伯父)

演出 キタモトマサヤ

舞台監督 沢渡健太郎

照明 西岡奈美

音響 大西博樹

舞台美術 佐野泰広

②熊取ゆうゆう大学 俳優・演劇講座発表公演

2021年三月十四日

大阪・熊取町市民会館ホール

出演 講座受講生のみなさん

演出+舞台監督+照明+音響 キタモトマサヤ